

万次郎の新しい写真を発見 ホイットフィールド船長と記念撮影か

理事 北代 淳二

万次郎が恩人のホイットフィールド船長と一緒に写したと見られる写真がアメリカで発見され、大きな話題になっています。

万次郎の第2の故郷米国マサチューセッツ州フェアヘーブンの隣町ニューベッドフォードの図書館で、このほど所蔵する古い写真の整理中に偶然見つかったものです。

写真の右側にはホイットフィールド船長らしい白髪で口ひげをはやした男が座り、そのそばに万次郎と見られる三つ揃いの背広を着て帽子を手にした男が、高い椅子に浅く坐っています。

古写真で画質が悪い上に説明資料が何も残っていないので、推測の域を出ませんが、既存の写真と比べると、顔の特徴から左側の男はほぼ万次郎と見て間違いなく、また白髪の男はホイットフィールド船長と思われると、船長の子孫が認めています。

万次郎が日本へ帰ってからホイットフィールド船長と再会したのは一度だけで、1870(明治3)年10月のことでした。この時万次郎は明治政府が派遣した普仏戦争視察団の一員に選ばれ、アメリカ経由で渡欧しました。そしてニューヨークで船を待つ間を利用してフェアヘーブンを訪ね、船長一家との念願の再会を果たしたのです。万次郎がゴールドラッシュに加わるため、船長のもとを離れた1849年から実に21年ぶりのことでした。万次郎は43歳、船長は65歳になっていました。写真はこの時の記念に撮られたものと見られます。

万次郎とホイットフィールド船長が145年ぶりにそろって姿を現したことになりますが、重要な歴史資料写真として公認されるためには、さらに専門家の鑑定と検証が必要でしょう。



ニューベッドフォード公共図書館提供

「3人の大統領」とジョン万次郎

中浜万次郎の会 塚本 宏

幕末に、アメリカ社会を初めて体験した日本人がジョン万次郎だったことはよく知られています。

しかし、土佐出身の一介の漂流民に過ぎなかった万次郎を戦前、3人のアメリカ大統領が開国に大きな貢献をしたと高く評価していたことをご存知ない方も多いのではないのでしょうか。

もちろん、「ホイットフィールド・万次郎友好記念館」のある町フェアヘーブんに滞在した期間中(意外に短く3年2か月でしたが)に本人が大統領に会えるはずもありません。

一方、アメリカに帰化した第一号のジョセフ・ヒコ(浜田彦蔵)が、別の3人の大統領(第14代～第16代のF.ピアス、J.ブキャナン、A.リンカーン)と実際に面接しているのは対照的です。

実は、万次郎が評価されたというのは、彼の没後20年を経た後のことですが、そこには日米親善外交にとって貴重な裏面史があったのです。

日本外交の長老、陸奥宗光、小村寿太郎の後継者と目される石井菊次郎子爵(1866～1945)のことを知る人も、今日では少ないはずですが。彼は、外務大臣、駐米大使などの経験者で、第一次大戦後の国際連盟・日本代表としても活躍されました。最高の親米家でありながら、不幸にして1945年5月25日の東京大空襲でなくなった悲劇の外交官でしたが、万次郎とは深い縁で結ばれています。

石井子爵と万次郎の長男、中濱東一郎(1857～1937)

との交友関係は、万次郎存命中の明治29年秋、石井が朝鮮の仁川領事時代から始まり、トップクラスの外交官と著名な医師と専門は違うものの、同じ「日本倶楽部」の会員同士で昵懇の仲でした。

大正6(1917)年暮、日本倶楽部で催された石井大使の米

国赴任の送別晩餐会の席上、石井の方から万次郎の恩人ホイットフィールド船長の郷里、フェアヘーブンへ感謝の贈物をしてはどうかと、勧奨的な依頼がなされたのです。東一郎は即座に快諾して、当時の外務省とも折衝の上、翌1918年の独立記念日に合わせてフェアヘーブンで、石井大使出席のもと「日本刀」の献呈式典を催すことになりました。

式典当日(1918年7月4日)、フェアヘーブン、ニューベッドフォード両町は住民あげての祝賀ムードに包まれ、町中に日米両国の国旗が翻り、参加者は1万人を数え、まさにマサチューセッツ州の「州祭」の観を呈したと言います。

式典で「歓迎の辞」を演説したのは、当時のマ州・副知事ジョン・カルヴァイン・クーリッジ(1872～1933)で後の第30代大統領でした。その触りの箇所だけを紹介すると次の通りです。

彼が、日本人の国民性である「孝行」を成し遂げる決心をしたことは教訓とすべきだと述べたあと、「彼の帰国は日本朝廷に対する米国の第一の大使」the first ambassador



中濱東一郎

of America to the court of Japan”であると言うことを得るものにて、……ペルリーが日本へ派遣された時も、彼が居りたるが為に此一行は友誼に満てる歓迎を受けたのであります。(東一郎の翻訳)

まさに、万次郎に対する最高の賛辞そのものでしょう。なお、クーリッジは、名門デラノ家の末裔で、ジョン・ハウランド号の船主の一人、ウォレン・デラノ船長の縁者であることも付け加えておきます。

主賓の石井大使による「中濱博士より贈られた太刀の贈呈」演説も、堂々として素晴らしいのです。石井個人というよりは外務省で事前に入念に準備された原稿だったのです(詳細は割愛)。

太刀受納の辞は、ホイットフィールド船長の3代目、トーマスが行い、「……両国民は互いに信義と好意との確証としてこの式典を賛美するでしょう」と述べています。

万次郎が「架け橋」となった、見事な日米親善友好の一幕でした。

式典の終了直後、現役第28代トーマス・ウッドロウ・ウィルソン大統領(1856~1924)が、石井大使に送った親書(1918年7月9日付)の中で、「中濱万次郎の物語については特に感興を覚えたり。日米間に於ける此種の連鎖は永く喜びを以て私の記憶に残るならん」と熱っぽく記しています。

石井自身も、後年、この式典を振り返って、自分が「万次郎の紀行を外交に利用して日米親善の一助たらしめんと望み」が完全に達せられて満足し、ウィルソンの手紙を中濱家の貴重な記念物として、中濱博士に寄贈した時、初めて愉快なる義務を済ませることが出来た、と述懐しています(「外交随想」)。

三人目の大統領は、前述の二人より我々になじみの深い第32代フランクリン・デラノ・ルーズベルト(1882~1945)です。もちろんアメリカ人からも“FDR”と親しんで呼ばれている人気の大統領であることは言うまでもありません。この方も、実はデラノ家の末裔で、彼の実母、サラ・アンは前述のデラノ船長の孫に当たります。

ここで、再度、石井の登場となります。時代は下って昭和8(1933)年5月に、石井特命全権大使は倫敦経済会議の予備交渉のため、ワシントンDCに出張し、就任早々のルーズベルトに会っています。石井ら一行を歓迎する午餐会の

席上、大統領は、因縁浅からぬ石井子爵のワシントン再訪を愉快に思うと述べた後、日米外交に重要な関係を有する二人のアメリカ人が同席していると前置きし、一人はマシュー・ペリー提督の孫「ペリー・ベルモント」で、いま一人は大統領自身であり、自分の曾祖父ウォレン・デラノが所有する捕鯨船ジョン・ハウランド号が万次郎を救出してマサチューセッツ州に連れて来たことを披露するなど懇切なスピーチをされました。

このことが契機となって、翌月に発信された東一郎宛ての親書(6月8日)の中で、石井子爵がワシントンに来た時、貴方が東京にお住まいのを知り、有名なご尊父について話し合いをしたこと、自分も祖父(正しくは曾祖父)から万次郎少年の話を聞かされたこと、など親しみを込めて書いています。中濱家、デラノ家との個人的な日米友好の歴史的な絆を大切にしようとする気持ちが伝わってくる手紙でした。

東一郎は、アメリカ大使館経由でこの手紙を受け取ってすぐ外務省へ行き、内田康哉外務大臣に報告しています。翌昭和9年7月には(グルー)駐日アメリカ大使にも面会してから、ルーズベルト大統領に返事(書留)を発送しています。民間レベルですが、アメリカ大統領ともごく細い糸で繋がっている模様がうかがえます。

さらに、東一郎の没後になりますが、昭和15(1940)年6月に、ホ船長の4代目、ウィラード・デラノ・ホイットフィールドが来日した際、万次郎の3代目、清夫妻主催の盛大な歓迎晩さん会が帝国ホテルで行われました(7月8日)。グルー大使夫妻も出席して、百年続いた両家の友情を讃える挨拶をしています。万次郎のアメリカの恩人に対する感謝の気持ちに基づいた、民間草の根交流が続いていたことは感動的でもあります。

官民一体の努力も虚しく、日米開戦となり昭和20年の破局を迎えたことは大変残念でなりません。この戦前の貴重な体験をよく知っていただき、ぜひ教訓として将来に生かしてゆくことを念願しております。

最後に、当「協会の会」・北代淳二理事から伺いました。が、ウィルソン、ルーズベルト両大統領からの「2通の親書」は、中濱家の「家宝」として今も大切に保存されているとのこと。然るべき場所で一般公開され、是非一度、実物を拝見したいと思うのは私だけでしょうか。

土佐清水訪問万次郎ツアーが開催されました

昨年の10月24日(金)から26日(日)にかけて、皆様にご参加頂き「土佐清水訪問万次郎ツアー」が行われました。まず「新老人の会」高知支部フォーラムでの1000人を集めた日野原理事長の講演会に参加し、続いて行われた日米の戦前からの民間交流として米国に37支部、日本では高知で28番目となる、高知日米協会の発足懇親会に参加しました。翌日はチャーターバスにて土佐清水に移動。この日はジョン万祭りと同開催された「市制60周年のつどい」で土佐清水は大いに盛り上がりおりました。市制式典では、中濱京さん、駐大阪・神戸米国領事やフェアヘブンからジェラルド・ルーニー氏も来席されました。私たちツアーに加えて全国から駆けつけたジョン万ツアーの参加者50名も、ジョン万群像広場で繰り広げられた仮装コンテストやかるた取り大会などのイベントを楽しみました。3日目には午前中に土佐清水で万次郎生家などを見学後、高知に移動し高知龍馬空港で解散となりました。

